

歴史学における「世紀」

森田直子

はじめに

「われわれの年代分類の混乱においてひとつの流行がもぐり込んできた。これは思うにかなり最近であるが、いずれにせよ熟考された結果ではないために、なおさら氾濫している。進んでわれわれは世紀によって数えるのだ。」——こう言ったのは、20世紀のフランス歴史学を代表する歴史家マルク・ブロック（1886–1944）である¹。「算術の仮面をかぶった人物たち」、つまり「世紀」が、「われわれの本のページに頻出している」という事態は、ブロックの指摘から60年以上経った現在も変わらない。それどころか、20世紀半ば以降、「世紀」は歴史関係の書物の頁に頻出するだけでなく、学際的な研究や議論の場にももぐり込んできた。例えば、フランスには「17世紀協会」²や「国際18世紀学会」³が誕生し、とりわけ後者は名前のとおり世界各国に支部学会を持ち、多くの学者が参加する有力な学会になっている⁴。アメリカには「19世紀学会」⁵や「学際的19世紀研究」会⁶、日本の京都大学には「20世紀学研究室」⁷があり、2006/2007年には、本稿掲載誌『19世紀学研究』の母体である「19世紀学学会」と「19世紀学研究所」ができた。マス・メディアにおいては、「世紀」という言葉は氾濫気味ですらある⁸。

こうした「世紀」概念をめぐり、本稿では、まず、「世紀」という言葉が成立し、利用され始めたのはいつ頃なのかをドイツ語を中心に概念史的に検証し⁹(I)、つぎに、歴史学における「世

¹ 「マルク・ブロックの名は、歴史家仲間では広く知られており、ブロックを知らねばもぐりだと言ってもよいほどなのですが、[中略] 専門外の方にはそう知られている名前ではないかもしれません。[中略] ブロックは20世紀のフランス歴史学を代表する歴史家であって、近代歴史学とは区別された意味での現代歴史学の誕生に大きく貢献し、世界的に影響を及ぼした歴史家と言うことができるでしょう」(二宮宏之『マルク・ブロックを読む』(岩波書店 2005)、1頁)。本文の引用は、マルク・ブロック著／松村剛訳『歴史のための弁明—歴史家の仕事—』(岩波書店 2004)、159頁。1949年に公刊された原作は讃井鉄男訳(岩波書店 1956)として邦訳されたが、1993年に原作が校訂され、その第二版をもとに松村訳が出版された。原作の比較および解説については以下を参照：松村訳『歴史のための弁明』あとがき、二宮『マルク・ブロックを読む』172–195頁。

² Société d'études du 17ème siècle. 詳しくは <http://www.17e-siecle.org/> を参照。

³ Société Internationale d'Études du XVIIIème Siècle. 詳しくは <http://www.iseecs.org/> を参照。

⁴ 「日本18世紀学会」は、東京大学大学院人文社会系研究科の美学芸術学研究室に事務局を置く。詳しくは <http://www.soc.nii.ac.jp/jsecs/index.html> を参照。

⁵ Nineteenth Century Studies Association. 詳しくは <http://www.english.uwosh.edu/roth/ncsa/> を参照。

⁶ Interdisciplinary Nineteenth-Century Studies. 詳しくは <http://www.nd.edu/~incshp/> を参照。

⁷ Twentieth Century Studies. 詳しくは <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/20century/> を参照。

⁸ 「世紀の」あるいは「今世紀最…の」という表現は、きわめて希な現象を強調するための修飾語であり、各種情報が氾濫する現代社会において、メディアが好んで使用するレトリックである。日本語特有の表現でもなく、例えばドイツ語では、ブラハやドレスデンなどの観光資源にも深刻な被害をもたらした2002年夏のエルベ川の氾濫は「世紀の洪水 Jährhunderthochwasser」、2003年のヨーロッパ規模での酷暑は「世紀の夏 Jährhundertsommer」と名付けられ、当時のメディアを賑わした。

⁹ ここでいう概念史が最終的に目標とすべき方向性は：Brunner, O. / W. Conze / R. Koselleck (Hg.), *Geschichtliche Grundbegriffe*, 8 Bde., Stuttgart 1972-1997.

紀」の利用について、「長い19世紀」概念を具体例として批判的に考察し（II）、議論のきっかけを提供することを目的とする¹⁰。

I.

英語の「世紀」century は、『オクスフォード英語辞典』(= OED)によれば、ラテン語の centuria から派生した語である¹¹。その centuria の原義は、「100個、100人のまとまり」である。OED も、century とは「古代ローマ軍の一単位で、歩兵中隊 manipule の半分を構成し、おそらく当初は100人から成っていた」という説明を第一に挙げている。説明の二番目も古代ローマの用法で、三番目に「100個のまとまり；クリケットなどのゲームでの100点；(19世紀以降の俗語で) 100ドルや100ポンドのこと」という説明があり、四番目に初めて「100年の期間のことで、もともとは century of years と言った」という説明が出てくる。この意味での最初の用例は1626年となっている。続く五番目の説明として、「標準的な年代の画期、とりわけ推定上のキリストの誕生日から起算される、継続する100年間；その日から紀元100年までの100年間がキリスト暦の第一世紀であり、1801年から1900年（この年も含む）が19世紀」とある。ここに挙げられている用例の最初は1638年のものである¹²。

ドイツ語の「世紀」は、現在では Jahrhundert を用いるのが一般的である。OED にも匹敵する画期的な語源学的辞書、グリム兄弟の『ドイツ語辞典』(1854-1960)¹³が示すところによると、Jahrhundert は、英語の場合とは異なり、centuria からではなく saeculum からの翻訳だという¹⁴。言語学者ユストゥス・ショッテルが、その著『ドイツ主要言語詳細論説』(1663年)において初めて saeculum を Jahrhundert と独訳し、文字通り100年を意味する語として17世紀末以降に浸透していった¹⁵。とはいえ、18世紀前半に刊行されたドイツ語初の本格的百科事典『ツェードラー事典』(1731-54)においては、Jahrhundert の項を検索すると Seculum を参照せよ、となっている¹⁶。Seculum もしくは Säkulum は、saeculum をそのままドイツ語化したもので、グリムの『ドイツ語辞典』でも Säkulum は100年間のこと、と説明されている¹⁷。しかし、グリムの Säkulum の解説は Jahrhundert に比べて簡素で、現代ドイツ語に至っては、Säkulum の出番は非常に限られている。

¹⁰ 本稿は、2007年8月26日にジュネーブの Fondation Hardt において、新潟大学のコア・ステーション「19世紀学研究所」を紹介することを課題にドイツ語で口頭報告したものを下敷きに、日本語で大幅に書き直したものである。

¹¹ *Oxford English Dictionary*, second edition, vol. II, 1989, p. 1041.

¹² *Oxford English Dictionary*, second edition, vol. II, 1989, p. 1042.

¹³ Grimm, J. / W. Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, 32 Bde., Leipzig 1854-1960. なお、この辞書はデジタル化され、インターネット上でも公開されている。

¹⁴ Grimm / Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd. 10, Leipzig 1877, Sp. 2243.

¹⁵ Schottel, Justus G., *Ausführliche Arbeit Von der Teutschen HauptSprache*, Braunschweig 1663, S. 411. なお、この著作もインターネット上で閲覧できる。

¹⁶ Zedler, J. H., *Grosses vollständiges Universalexicon aller Wissenschaften und Künste*, 64 Bde., Leipzig / Halle 1731-1754, hier Bd. 14, S. 170. なお、この辞書もデジタル化され、インターネット上でも公開されている。

¹⁷ Grimm / Grimm, *Deutsches Wörterbuch*, Bd. 14, Leipzig 1893, Sp. 1678.

ところで、古ラテン語の *saeculum* とは、ある一区切りの時間を表す概念であり、人間の生きる時間＝一生もしくは世代、君主の統治期間、そこに生きる人々や支配的な慣習という点で一括しうる時代、あるいは現世や世俗、などという意味で使われたようである。そこから発展して、不特定の長い期間、継続する長い年数を表すことにも用いられた¹⁸。*saeculum* と同義の中世ラテン語の *saecularis* には、キリスト教の影響から、100年ごとの、100年間続く、100年に一度の、などという意味と並んで、世俗の、異教的な、といった意味が付与、強化された¹⁹。

フランス人中世史家ジャック・ルゴフ (1924-) が書いたところによると、「世紀を意味するラテン語の *saeculum* は、古代ローマではさまざまな期間をあらわし、人間の世代という観念に結びつけられることが多かった。キリスト教会のもとでもこの言葉の古い意味は保たれたが、一方、あの世との対比で、地上の生、人の生という新しい意味が付け加えられた。だが、16世紀、一部の歴史家や碩学の間で、時を百年単位で区切ろうという考えが生まれてきた。この単位が表す時間はかなり長く、100という表記は簡単で、世紀を意味する単語 [siècle] にはラテン語の威光が残っていたが、それにもかかわらずこれが定着するまでには非常に長い時間がかかった。この言葉と術語がはじめて本格的に用いられたのは18世紀のことである。』²⁰

以上の簡単な叙述において注目すべきは、現在ではまず躊躇なく相互に置換される英語の「世紀」と、独仏語の「世紀」とでは語源が異なる点である。英語では、100という数のまとまりに、時間的区切りの概念が接続して「世紀」となったと考えられるのに対し、独仏語ではむしろその逆で、様々な長さの期間を表わす概念に100年という単位が入り込んだものが「世紀」になったようである。ともあれ、いずれの言語においても、16世紀以降になってようやく100年を一つの時間的まとまりとして数える固有の言葉が誕生したと考えることが出来そうである。もっとも、誕生にいたる背景として、暦のあり方も考慮に入れなくてはならない。1年を365日と計算することは古くからの共通理解であったとしても、紀年法における第一年目がいつかということ、いわゆる西暦というかたちで6世紀ごろに提案され、10世紀頃によく定着していったとされる²¹。そして、グレゴリオ暦 (1582年) 導入をめぐる動きが、西暦年号をより一般化し、時間を区切って捉える思考法を広め、「世紀」概念の確立に貢献したと考えるべきであろう²²。

近代ドイツ語の起点として引き合いに出されることの多いヨーハン・クリストフ・アーデルンクの『ドイツ語辞典』(初版1774-86、第二版1793-1801)によれば、*Jahrhundert* とは、「100

¹⁸ 参照：Georges, K. E., *Lateinisch-Deutsch. Ausführliches Wörterbuch*, 2 Bde., Hannover 1913-1918, hier Bd. 2, S. 2447; 国原吉之助『古典ラテン語辞典』(大学書林 2005) 665頁。

¹⁹ Georges, *Lateinisch-Deutsch*, Bd. 2, S. 2447. これは *säkular* という形容詞形で、現代ドイツ語でも時々用いられる。

²⁰ J. ルゴフ「暦」(エイナウディ百科事典第2巻所収)、ここでは以下より引用：J. プルゴワン／池上俊一監修『暦の歴史』(創元社 2001) 144-145頁。

²¹ 例えば以下を参照：D. E. ダンカン著／松浦俊輔訳『暦をつくった人々：人類は正確な一年をどう決めてきたか』(河出書房新社 1998) 第5章。

²² ヨーロッパにおけるグレゴリオ暦導入の経緯については以下に詳しい：ダンカン『暦をつくった人々』第13、14章。

年間；とくに年号における100年間；現在の世紀 *Jahrhundert*、我々が生きている1700年（ママ）から1800年の期間」となる²³。アーデルンクはまた、*Jahr*（年）と *Hundert*（百）の組み合わせは、1510年のことを（千を除いて）510年と称したキリスト教の慣習に由来するのではないかと推測する。なお、*Saeculum*を語源とすることも示唆されるが、別個に *Säkulum*等の見出し語は設けられていない。

こうした断片的な事実から結論的なことを導くには細心の注意を要するが、少なくともドイツ語に限れば、17世紀後半に100年という期間を意味する *saeculum* が *Jahrhundert* に訳され、それは、西暦紀年法と結びつき第何世紀という意味を伴いつつ、18世紀を通じてドイツ語の語彙の中に定着していった、という流れが見えてこないだろうか。そして、19世紀に *Jahrhundert* 概念は社会の中に広く浸透していくことになった。それを後押しした要因はいくつか考えられるが、ここでは、19世紀ドイツに誕生したとみなされる近代歴史学との関連を考えてみたい。

ドイツでの歴史学の成立に寄与した人物として、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト（1767–1835）とレオポルト・フォン・ランケ（1795–1886）の二人を取り上げよう。前者は、プロイセン王国の首都ベルリンに初の大学を設立した人物であるが、その大学がのちに彼の名を正式に冠するようになったのは、教育改革者としてのフンボルトの功績を讃えるためだけではなかった。フンボルト自身、言語学者、言語哲学者としてはもちろんのこと、あらゆる人文科学の発展を基礎づけたとも言える文人であった²⁴。彼は、「ギリシャ都市国家の崩壊と没落の歴史」（1807–1808）²⁵、「世界史についての省察」（1814）²⁶、そして、ランケが大きな感化を受けたという「歴史家の課題について」（1821）²⁷などの歴史研究、あるいは歴史学に関連する著述を残している。そのフンボルトが、1796から翌年にかけて、「18世紀」と題した論文を発表した²⁸。その論文では、彼自身の言葉を使えば、「その世紀に生きた人々 *die Menschen des Jahrhunderts*」を描き出すという「歴史（学）の仕事 *das Werk der Geschichte*」ではなく、「その世紀における人間性 *die Menschheit in demselben*」を描き出すという「歴史についての哲学的熟慮の仕事 [*das Werk*] *des philosophischen Raisonnements über dieselbe*」を問題としており²⁹、具体的には、ある特定の時代の特徴を描き出すことの意味、難点、そしてその方法が論じられ

²³ 引用は第二版より。Adelung, J. C., *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart mit beständiger Vergleichung der übrigen Mundarten, besonders aber der Oberdeutschen*, 4 Bde., Leipzig 1793-1801, hier Bd. 2, Leipzig 1796, Sp. 1421. なお、第二版も、アーデルンクの死後に出版された1808年および1811年の版もデジタル化され、インターネット上で公開されている。1808年版、1811年版における *Jahrhundert* の説明は、「1700年から1800年」の部分が、「1800年から1900年」と書き換えられている以外は第二版と同一である。

²⁴ フンボルトについては、さしあたり以下を参照：亀山健吉『フンボルト：文人・政治家・言語学者』（中公新書 1978）。

²⁵ Humboldt, W. v., *Geschichte des Verfalls und Unterganges der Griechischen Freistaaten*, in: Leitzmann, A. (Hg.), *Wilhelm von Humboldts Werke*, Bd. 3, Berlin 1904 (Nachdruck Berlin 1968), S. 171-218.

²⁶ Humboldt, W. v., *Betrachtungen über die Weltgeschichte*, in: Leitzmann, A. (Hg.), *Wilhelm von Humboldts Werke*, Bd. 3, S. 350-359.

²⁷ Humboldt, W. v., *Über die Aufgabe des Geschichtschreibers*, in: Leitzmann, A. (Hg.), *Wilhelm von Humboldts Werke*, Bd. 4, Berlin 1905 (Nachdruck Berlin 1968), S. 35-56.

²⁸ Humboldt, W. v., *Das achtzehnte Jahrhundert*, in: Leitzmann, A. (Hg.), *Wilhelm von Humboldts Werke*, Bd. 2, Berlin 1904 (Nachdruck Berlin 1968), S. 1-112.

²⁹ Humboldt, *Das achtzehnte Jahrhundert*, S. 4.

る。その際、フンボルトは、他ならぬ18世紀を対象とすることの必然性を説明する。すなわち、18世紀は、古い時代からかなり異なった新しい時代に移行する転換期であり、また、ギリシャ・ローマの古代、「4世紀から16世紀半ばまで vom 4^{ten} Jahrhundert n. Chr. bis in die Mitte des 16^{ten} hin」³⁰の中世、という先行する二つの時代固有の結果と、双方の機能的な作用がはっきりと見えてくる三番目の時代に属し、しかもその三番目の時代を完全に見渡すことの出来る位置にある、と³¹。ここには、古典古代＝第一の時代、中世＝第二の時代、その統合としての第三の時代という歴史時代区分が見て取れるが、これはヘーゲル的な歴史哲学思想につながるものというよりは、ルネサンス期に誕生した時代三分法——古代－中世－近代——にのっとったものと考えられる³²。古代と中世に続く第三の時代の最後に位置する18世紀の末が、同時代人フンボルトによって次の新しい時代への転換期だと意識されていることに注目すべきであろう³³。

そのフンボルトの創設したベルリン大学で、1825年から非常勤で、1834年以降は正教授として教鞭を執ったのが「歴史学の太宗」とも言われるランケである³⁴。ランケの歴史観は、林健太郎によれば、歴史家としての出発時にすでに出来上っていて、その後本質的な変化はなく、主に彼の浩瀚な歴史叙述の中に具体的な事実の説明を通じて語られているが、1854年にバイエルン国王マクシミリアンⅡ世に対して行なった講義『近世史の諸時期について』の序説には、歴史の理論的な基本問題について彼の端的な見解が見られる、という³⁵。この『近世史の諸時期について』は³⁶、未完に終わったランケの『世界史』の全体像を知る上でも意義を持つものであるが、ここでは、その中でランケが「世紀」という時代区分を積極的に利用していることに注意を喚起したい。序説を除く8節の表題を訳出してみると以下ようになる³⁷。

1. ローマ帝国の基礎：キリスト紀元後最初の4世紀についての概観
2. ゲルマン人の侵入とアラブ人の侵略によるローマ帝国の変化
3. カロリング時代とドイツの帝位
4. 教権時代：11世紀から13世紀
5. 第五の時期：14世紀と15世紀
6. 宗教改革と宗教戦争の時代：15世紀末から17世紀半ば頃まで
7. 列強の誕生と発展の時代：17世紀と18世紀
8. 革命の時代

実は、ランケの代表作のタイトルも、『フランス史：16、17世紀を中心に』（1852-61）、『イギ

³⁰ Humboldt, *Das achtzehnte Jahrhundert*, S. 24.

³¹ Humboldt, *Das achtzehnte Jahrhundert*, S. 20-28.

³² 参照：大島康正『時代区分の成立根拠』（筑摩書房 1949、理想社 1967）。とくに第二章。

³³ 例えば、次のような記述が散見される：「われわれの時代は、今まさに去り行かんとする時代から、新しい、かなり異なった時代へとわれわれを運ぶように思われる」（Humboldt, *Das achtzehnte Jahrhundert*, S. 20.）

³⁴ 林健太郎「ランケの人と学問」（林健太郎責任編集『世界の名著：ランケ』（中央公論社 1974）5-41頁所収）7頁。

³⁵ 林「ランケの人と学問」23頁。

³⁶ Ranke, L. v., *Über die Epochen der neueren Geschichte*, München / Leipzig 1921⁸：邦訳は、鈴木成高・相原信作訳『世界史概観』（岩波文庫 1941）。

³⁷ Ranke, *Über die Epochen der neueren Geschichte*, Inhaltsverzeichnis. 鈴木・相原訳を参照しながら森田が訳出。

リス史:16, 17世紀を中心に』(1859-68)、あるいは『19世紀のセルビアとトルコ』(1879)のように、「世紀」を用いた時代限定がついている³⁸。「世紀」を用いることがランケの個人的な好みに過ぎなかったとしても³⁹、およそ40年にわたってベルリン大学の歴史学の教授として後々まで持った影響力を考え合わせるならば、彼が「世紀」概念を歴史学に定着させるのに寄与したとみなすことはあながち間違いではないだろう⁴⁰。

ちなみに、ランケも『歴史・政治雑誌』(1832-36)を主筆、編纂したが、19世紀は総じて定期刊行物の時代であった。とくに、イギリスでは、18世紀にヨーロッパを先駆けて文芸の公共圏が形成され、19世紀には定期刊行物が活況を呈した。1877年には、その名も『19世紀 The Nineteenth Century』という月刊誌が発刊され、大きな成功を収めた⁴¹。その雑誌は、「帝国の時代」の時事問題をめぐる論評を主として掲載し、「19世紀」という名称は、現在の感覚からいえば、「現代」もしくは「時代」といった意味合いで用いられているようである。

そして、19世紀末には、「世紀末 fin de siècle」現象とともに⁴²、「世紀 siècle」概念はヨーロッパ社会に一層浸透した⁴³。ドイツ語では「世紀転換 Jahrhundertwende」という表現がマス・メディアによって広められた⁴⁴。こうして「世紀」概念は、19世紀を通じて歴史学やジャーナリズムなどからの追い風を受けつつ次第に社会に定着し、19世紀の末には完全に市民権を得ることになった。

日本の状況にも一瞥を加えておきたい。100年を一つの単位として把握する日本固有の概念の有無については、改めて考察する余地があるかもしれないが、「世紀」という西暦紀元と結びついた概念は、間違いなく輸入されたものである。小学館の『日本国語大辞典』(初版1972-76、第二版2000-02)の「世紀」の項によれば、「英語 century の訳語としては、当初『百年』『世紀』などさまざまな語があり [中略]、ようやく明治一五年(一八八二)ごろから、新聞・雑誌の記事、書名、辞書の訳語などに使われるようになった」⁴⁵という。同項も指摘するように、日

³⁸ ランケの著作については、以下を基本とした: Dotterweich, V., Ranke, Leopold von, in: Bautz, F. W. (Hg.), *Biographisch-bibliographisches Kirchenlexikon*, Bd. 7, Herzberg 1994, Sp. 1324-1355. 教会史に関する著者事典ではあるが、歴史や音楽など関連分野の人物とその著作を調べるのにも有用。オンラインで閲覧できる。

³⁹ 「…ヘーゲルのような汎論理主義、ないし汎神論を排して、個別的实在そのものに生きた精神をみようとしたランケにおいて、一般に歴史叙述の自明の前提のごとくされる時代三分法、ないしこれに類する図式的な時代区分法が、黙殺されたのは当然である」(大島『時代区分の成立根拠』(理想社 1967) 118-9頁)にしても、「世紀」を利用する積極的な理由とはならない。

⁴⁰ Vgl. Faber, K.-G., Epoche und Epochengrenzen in der Geschichtsschreibung, in: *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, 44-2 (1981), S. 105-113, hier S. 109.

⁴¹ *The Nineteenth Century*. ジェイムズ・ノウルズ(1831-1908)が編纂。1900年以降は、タイトルを *The Nineteenth Century and After* とした。

⁴² ここでは、さしあたり、19世紀末のヨーロッパにおける、文学・芸術における新しい潮流、知のパラダイムの転換、マス・メディアの登場などを包括して「世紀末」現象と捉えたい。概説として以下を参照: 福井憲彦『世紀末とベル・エポックの文化』(山川出版社 1999)。

⁴³ 英語圏でも、turn-of-the-century と並び、フランス語の「世紀末」fin de siècle という表現が使われたようである。

⁴⁴ ドイツの「世紀末」をめぐる研究は多いが、ここでは簡潔な概観として以下を参照: Frevert, U., *Jahrhundertwenden und ihre Versuchungen*, in: Dies. (Hg.), *Das Neue Jahrhundert. Europäische Zeitdiagnosen und Zukunftsentwürfe um 1900*, Göttingen 2000, S. 7-14.

本で初の和英辞典と言われる『和英語林集成』（1867）の第三版（1886）が、century を「セイキ」と訳している⁴⁶。「世紀」という漢字が定着した経緯など、さらに追究の余地がありそうだが、少なくとも1880年代には「世紀」は日本語の語彙の中に定着していたようである。読売新聞を繰ってみると、1888年初頭にアメリカ（サンフランシスコ）で『第十九世紀』と題する新聞が日本人によって発刊されたらしいことが分かる⁴⁷。この新聞は、「治安に妨害ある」とみなされ、翌年には官令で発売頒布を禁止され、新聞紙を差し押さえる措置がとられた⁴⁸。ちなみに、前述のイギリスの月刊誌 The Nineteenth Century も『第十九世紀』と訳されて1900年の読売新聞紙上に登場している⁴⁹。

そして日本でも、19世紀が終わり20世紀が始まるという事実が、「世紀」概念の普及に大きく寄与することになった。20世紀が1900年か、それとも1901年に始まるのかという問いは、時事新報、読売新聞紙上でそれぞれ話題にされ⁵⁰、「十九世紀送別大演説会」なる催事の案内や報告⁵¹、慶応大学で催された「十九世紀・二十世紀の送迎会」の様子の記事⁵²などが新聞紙上に掲載され、毎日新聞は1900年（!）の1月1日から「第二世紀：既往の懐憶将来の希望」というタイトルの記事を9回にわたり連載し⁵³、時事新報は1901年1月1日に「日本が文明列強群に仲間入りする世紀」という見出しの記事を⁵⁴、報知新聞は1月2日から「二十世紀の予言」を2日連続で掲載した⁵⁵。

「世紀」という言葉が日本語の語彙の中に登場してから20年も経たないうちに、この概念は少なくとも新聞メディアには完全に浸透したと考えて良いだろう。「世紀」のメディアへの浸透が、社会一般への浸透と連携していたであろうことは指摘するまでもない。なお、明治政府は、「[時]の文明開化」として1872年末にグレゴリオ暦を導入したが、その際、西暦紀元の年号は公式には全く言及されていない⁵⁶。読売新聞が1902年の11月末に「年数早見」として、西暦紀元と明治紀元の年数の対照の計算方法を説明していることから⁵⁷、日本では、本来は西暦紀元を前提とする「世紀」概念が、西暦年号に先行するような形で広まったのかもしれないという推測もできる。こうして19世紀の末に輸入された「世紀」概念が、20世紀を通じて日本語の中に着

⁴⁵ 『日本国語大辞典』（小学館 第二版）第七巻（2001年）1153頁。

⁴⁶ 『和英語林集成』は、各版がオンライン公開されている。第三版に至るまで、century は「ヒャクネン」という訳のみがつけられていて、第三版で、「ヒャクネン、セイキ」と訳されている。なお、元の表記はカタカナではなくローマ字。

⁴⁷ 読売新聞1888年2月28日朝刊2面。

⁴⁸ 読売新聞1889年12月21日朝刊1面。同1889年12月29日朝刊。

⁴⁹ 読売新聞1900年8月13日朝刊2面。読売新聞は、1900年7月25日から9月23日にかけて、中国での「義和団の乱」をめぐる国際世論の紹介として、英米独仏露における新聞雑誌掲載記事を取り上げた。イギリスの『第十九世紀』もその一つである。

⁵⁰ 時事新報1899年2月16日；読売新聞1899年12月31日朝刊2面。

⁵¹ 読売新聞1900年12月13日朝刊3面、同12月17日朝刊2面。

⁵² 時事新報1901年1月2日。

⁵³ 毎日新聞1900年1月1日－1月9日。

⁵⁴ 時事日報1901年1月1日。

⁵⁵ 報知新聞1901年1月2日－1月3日。

⁵⁶ 参考：岡田芳朗『明治改暦：「時」の文明開化』（大修館書店 1994）。

⁵⁷ 読売新聞1902年11月25日朝刊2面。

実に根を下ろしたことは、「はじめに」の中でも触れたとおりである。

II.

冒頭に引用した箇所が続けてマルク・ブロックは言う。「われわれはもはや諸世紀をその英雄たちによっては名づけない。出発点を一度決めると、百年ごとにおとなしく次々と世紀を並べて名づけるのである」⁵⁸。「一言で言えば、恣意的に選ばれたある厳密な振り子のリズムによって、その規則性がまったく無縁な現象を分配するようなことになるのである。それは無謀な約束である。われわれはもちろんその約束をほとんど守れず、まるで混乱をまたひとつ導入したにすぎない。明らかに、もっとよく探すべきである」⁵⁹。これは、補足説明をするまでもなく、歴史が100年を単位に変化したり、ましてやそれが西暦年号の末尾01の年に始まるという法則など存在しないにもかかわらず、歴史家が頻繁に「世紀」を利用することを問題にしている。以下では、こうした歴史学における「世紀」概念が、一般にどのような文脈において問題とされうるのかを整理し、とくに時代区分としての「世紀」についてやや立ち入って考察することにした。

ブロックは、以上に引用した「世紀」をめぐる記述を、歴史的分析における用語の問題の中に位置づけている。しかし、それが表面的な用語の問題にとどまらないことは、彼の書を通読すれば明らかである。『歴史のための弁明』と題されたこの書は、第二次世界大戦中のレジスタンス活動ゆえに銃殺された歴史家の遺著であると同時に、子供からの問い「パパ、だから歴史が何の役に立つのか説明してよ」⁶⁰に答えるべく「歴史家の仕事」を説明するものである⁶¹。ブロックは、歴史学とは「時間における人間たちの学問」であるという前提のもと、次のように言う。「具体的な生きた現実、その躍動の不可逆性に引き戻された現実である歴史の時間は、諸現象がひたるプラズマそのものであり、諸現象を理解する場のようなものである。[中略]この本当の時間は、その性質上持続的なものである。それはまた、常なる変化でもある。このふたつの特性の対立から、歴史研究の大問題の数々が生まれる」、と⁶²。

このことから分かるように、「世紀」概念は——第一に——歴史の時間という文脈において問題とされうる。ブロックが同僚の歴史家リュシアン・フェーヴル（1878-1956）と創刊した『経済社会史年報 Annales d'histoire économique et sociale』（1929-）をその祖とする「アナル学派」の時間をめぐる考察が好例である。なかでも、ブロックとフェーヴルのあとを継承して「アナル学派」を発展させたフェルナン・ブローデル（1902-1985）は、歴史における時間が三層に区分できることを提示した。すなわち、①政治的事件を扱う場合に意味を持つ1日

⁵⁸ ブロック著／松村訳『歴史のための弁明』159頁。

⁵⁹ ブロック著／松村訳『歴史のための弁明』160頁。

⁶⁰ ブロック著／松村訳『歴史のための弁明』ix 頁。

⁶¹ ブロックの人物像については例えば以下を参照：二宮『マルク・ブロックを読む』第1講。

⁶² ブロック著／松村訳『歴史のための弁明』8 頁。

や1年を単位とする「短い時間」、②価格曲線、人口動態、賃金動向などの変動局面を扱う場合に意味を持つ10年から50年を単位とする「少し長い時間」、そして、③経済システムや親族システムの持続する100年が最小単位となるような「きわめて長い時間」(＝賢人たちの時間)の三層である⁶³。この1958年に発表されたブローデルの論文とその「長期持続」という概念は、それを裏付ける具体的な研究『フェリペ二世時代の地中海と地中海世界』(1949)⁶⁴とともに、歴史学が直面する時間の問題にインパクトを与えた⁶⁵。もちろん、こうした歴史における時間をめぐり考察は、「世紀」概念を中心主題としたり批判したりするものではないが⁶⁶、歴史家が「世紀」概念を意識化するのに一役買うことになった。

歴史学における「世紀」概念が問題となりうる第二の文脈は、第一のものとは異なった次元に由来する⁶⁷。ブローデルにも強い影響を受けたアメリカの歴史社会学者イマニュエル・ウォーラーステイン(1930-)は、例えば、16世紀以降のグローバルな歴史を「世界システム」として把握、分析する画期的な作業をしたのち⁶⁸、歴史学を含む「19世紀社会科学」の持つ「偏狭でありながらもまだに我々を縛っている思考の枠組を脱思考 unthink」することを提唱した⁶⁹。本稿のテーマにひきつけて言えば、「教皇ピウス9世の頃」という表現よりも、「19世紀の第三・四半期」という方が一般論として「客観的」で、「科学的」であり、したがって「より良い」と本能的に受け止めてしまう歴史家の感覚や思考の枠組み自体を問題にしていると言えよう。ウォーラーステインは、「19世紀社会科学」のパラダイムには「<時空 TimeSpace >」という概念が欠けていたとし、彼なりの「<時空 TimeSpace >」概念を提案する。しかし、それはブローデルの「長期持続」を敷衍したものであり、「わたしは、時間と空間にかんするわたしたちの理解力、確信の根底の一つに異議を唱えるという、非常に困難で、非常に心を乱される道を踏み出すことを提案した。その道の終わりにあるのは単純なものではなく複雑なものである」と認め、「いっそう適切なカテゴリーを目指して奮闘しなければならない」⁷⁰と締めくくると

⁶³ フェルナン・ブローデル「長期持続—歴史と社会科学—」(井上幸治訳『フェルナン・ブローデル(1902-1985)』新評論1989、15-68頁所収)。簡明な解説としては、例えば以下を参照：竹岡敬温『『アナル』学派と『新しい歴史』』(竹岡敬温・川北稔編『社会史への途』(有斐閣選書1995)第1章、とくに21-29頁)。

⁶⁴ 邦訳：浜名優美訳『地中海(1-5)』(藤原書店1991-1995)。

⁶⁵ 『概念史』(註9参照)の確立に寄与したドイツの歴史家ラインハルト・コゼレック(1923-2006)も、歴史学方法論と時間との関係を追究し続けた。Koselleck, R. *Vergangene Zukunft. Zur Semantik geschichtlicher Zeiten*, Frankfurt a. M. 1979; Ders., *Zeitschichten. Studien zur Historik*, Frankfurt a. M. 2000。

⁶⁶ ブローデル自身「長期持続」の論文の中で「世紀」という言葉を頻繁に使用しているように、彼の意図は、「世紀」概念を疑問視し、それに取って代わる術語を提案しようということにあったわけではなかった。

⁶⁷ その背景にあるのはポストモダニズムと言えるかもしれない。ポストモダニストたちから歴史学に向けられる様々な批判に対し、実際に歴史研究に関わっている立場から歴史学を擁護する目的で書かれたものとして、以下を参照：リチャード・J. エヴァンズ著／今関恒夫・林以知郎監訳『歴史学の擁護：ポストモダニズムとの対話』(晃洋書房1999)。本稿との関連で言えば、歴史の時間や歴史における因果関係を扱った第5章が重要。

⁶⁸ 邦訳：川北稔訳『近代世界システム：農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立(I, II)』(岩波書店1981)、川北稔訳『近代世界システム1600-1750—重商主義と「ヨーロッパ世界経済」の凝集』(名古屋大学出版会1993)。

⁶⁹ I・ウォーラーステイン著／本多健吉・高橋章監訳『脱=社会科学：一九世紀パラダイムの限界』(藤原書店1993)。

⁷⁰ ウォーラーステイン『脱=社会科学』、213頁。

どまる。

以上の簡単な概観からも分かるように、「世紀」概念は、歴史の時間の問題、近代歴史学が前提とする分析や認識の枠組の問題との関連で批判的に考察されうるものである。これらの問題は、しかし、本質的であるがゆえに抽象的で、「世紀」概念についても、正面きって挑戦したり、ましてやそれを代替しうる別のより妥当な概念の発見に具体的に努めてきたわけではない。それに対して、歴史学における「時代区分」という文脈においては、歴史家は「世紀」概念と直接に対峙せざるを得ない。ここでは、歴史学における時代区分の必要性を前提とした上で⁷¹、「世紀」を問題にするこの第三の文脈について、近年とくにヨーロッパ史で受け入れられるようになってきた「長い19世紀」という術語を手がかりに考えることにしたい⁷²。

まず、最初に「長い19世紀」に注目したのは、20世紀後半を代表するイギリスの博識な歴史家エリック・ホブズボーム（1917-）とされる。ホブズボームは、『革命の時代：1789年-1848年のヨーロッパ』（1962）⁷³、『資本の時代：1848-1875年』（1975）⁷⁴、『帝国の時代：1875-1914年』（1987）⁷⁵という三部作で、フランス革命の1789年から第一次世界大戦開戦の1914年までを「長い19世紀」として一括りにする歴史像を提示した⁷⁶。その後、『極端の時代：短い20世紀1914-1991年』（1994）⁷⁷が出版されると、「長い19世紀」は、「短い20世紀」の対概念として注目を集め、徐々に利用されるようになってきた。

フランス革命およびそれに続くナポレオン支配が、ヨーロッパとくに西ヨーロッパ諸国に与えた衝撃は、同時代人にも明確に意識されうるもので⁷⁸、それは、現在からみても、とりわけ人権思想の点で画期を成している。フランス革命と同時代に進行した産業革命による生産様式、社会生活、経済システムの変化も、それに続く時代に重大な影響力を行使した。この「二重革命」を契機に誕生した価値やシステムの多くは、近代国民国家の総力戦としての第一次世界大

⁷¹ さしあたり、再度ブロックの言葉を紹介しておく：「時代の川は途切れることなく流れる。しかしながら、ここでもまたわれわれの分析は切断を行わねばならない。なぜならわれわれの精神の本性ゆえに、動きの中でも最も持続的な動きでさえ、それを目印ごとに分けなければわれわれは把握できないからである」（ブロック著／松村訳『歴史のための弁明』155頁）。また、木村靖二「『長い19世紀』と『短い20世紀』」（木村靖二・近藤和彦『近現代ヨーロッパ史』（放送大学教育振興会 2006）第1章）は、時代区分としての「世紀」について簡潔に論じており、非常に参考になる。

⁷² 例えば：Blackbourn, D., *The Long Nineteenth Century. A History of Germany, 1780-1918*, London 1998. この『長い19世紀：ドイツ史1780-1918年』という表題の本の前書きで、著者であるイギリス人のドイツ史家デイヴィッド・ブラックバーン（1949-）は、「この術語（＝「長い19世紀」）は、18世紀末の『二重革命』（1789年のフランス革命とイギリスにおける産業革命）と第一次世界大戦との間の期間を描くためにヨーロッパの歴史家たちによって幅広く使われている」（p. xiii）と断言している。また、次のような記述もある：「19世紀は、ヨーロッパの歴史家たちによって好んで、18世紀末に始まり20世紀初頭に終わった『長い世紀』とみなされる」（Frevert, U./ H.-G. Haupt(Hg.), *Der Mensch des 19. Jahrhunderts*, Frankfurt a. M. / New York 1999, S. 9）。

⁷³ 邦訳：安川悦子・水田洋訳『市民革命と産業革命—二重革命の時代』（岩波書店 1986）。

⁷⁴ 邦訳：柳父隣近・長野聰・荒関めぐみ訳『資本の時代 1848-1875 (1)』（みすず書房 1981）、松尾太郎／山崎清訳『資本の時代 1848-1875 (2)』（みすず書房 1982）。

⁷⁵ 邦訳：野口建彦・野口照子訳『帝国の時代 1875-1914 (1)』（みすず書房 1993）、野口建彦・長尾史郎・野口照子訳『帝国の時代 1875-1914 (2)』（みすず書房 1998）。

⁷⁶ 端的な記述は以下に見られる：『帝国の時代 (1)』12頁。

⁷⁷ 邦訳：河合秀和訳『20世紀の歴史 極端な時代（上・下）』（三省堂 1996）。

⁷⁸ 本稿Iに挙げたフンボルトの例を参照（註33）。

戦によってかなりの変質をみることになった。イギリスで「大戦争 The Great War」といえば第一次世界大戦を指すように、それが多くのヨーロッパ諸国とその社会に与えた影響もまた、同時代人からのみならず⁷⁹、一つの転換点として理解されてきた。フランス革命（1789年）と第一次世界大戦（1914/18年）が象徴する出来事が、ヨーロッパ史上突出していることは明らかである⁸⁰。そこから、本来の19世紀を画す1801年と1900年を前後に10数年ずつ延ばして両時点を結ぶ「長い19世紀」という用語が生まれた。

もちろん、1789年と1914/18年が19世紀を都合よく挟み込んでいるという理由のみから、「長い19世紀」が歴史家に広く受け入れられることになったとみなすのは短絡過ぎる。始点と終点を定めた時代区分が歴史学において意味を持つには、その時代としての特徴が提示されなければならない。これらについて、「長い19世紀」概念がとりわけ積極的に利用されているように見えるドイツ史に関して⁸¹、20世紀後半のドイツの歴史学界を牽引してきたユルゲン・コッカ（1941-）の整理によりながら見てみることにしたい。

まず、19世紀末が視野に入ってきた頃、ドイツの歴史家たちは過ぎゆく世紀を振り返り、それを一つの時代として把握しようと試みた。そこでは、国民国家の成立過程、絶対主義体制から立憲王政への移行、政治の変化（より広範な国民の政治参加）、プロレタリアートや女性の解放、資本主義経済の浸透、農業社会から工業社会への移行といった様々なプロセスが強調され、とくに、社会経済的变化における階級闘争や国家の中心的役割が注目を集めた。このような変化の過程や結果は、総じて一国史的＝ナショナルな観点から捉えられ、また、達成感やさらなる変化への期待とともに、前向きで楽観的な基調による把握がなされた。同時に、19世紀は、「哲学の世紀」、「最近では最も豊かな世紀」、「批判の世紀」、「歴史の世紀」、「社会の世紀」、「発明の世紀」、「ヨーロッパの世紀」、「ヨーロッパの平和の世紀」などと名付けられた⁸²。

こうした19世紀像は、第一次世界大戦とともに変化した。大戦は、一方において一国史的な視野で過ぎ去った時代を見る目をヨーロッパへと広げさせ、また、ドイツにとっての戦争＝敗戦が、それまで築いてきたものの本質的な崩壊や喪失と受け止められることで、遡及的に19世紀は市民的、自由主義的で平和な時代であったという世紀末の歴史観が確認されることにも

⁷⁹ 第一次世界大戦を、一つの時代の終わりと認識した同時代の歴史家は少なくない。有名なのは、イタリア人ベネデット・クローチェ（坂井直芳訳『19世紀ヨーロッパ史：増訂版』（創文社1982）や、ドイツ人フランツ・シュナーベル（*Deutsche Geschichte im neunzehnten Jahrhundert*, 4 Bde., Freiburg 1929-37）であろう。

⁸⁰ 重要な反論も存在する。例えば、ドイツとアメリカの近現代政治史を鋭く分析するドイツの歴史家パウル・ノルテ（1963-）は、社会史的にみると、1900年を挟む前後10数年の世紀転換期が（第一次世界大戦よりも）欧米にとって画期的意味を持っていたことを強調する：Nolte, P., 1900: Das Ende des 19. und der Beginn des 20. Jahrhunderts in sozialgeschichtlicher Perspektive, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 47 (1996), S. 281-300。また、イギリス帝国史の枠組において東アジアを研究するドイツの歴史家ユルゲン・オスターハンメル（1952-）は、アジアやアフリカ地域をも視野に入れた「グローバル・ヒストリー」の観点から、1789年と1914/18年の画期としての説得力のなさを指摘する。Osterhammel, J., In Search of a Nineteenth Century, in: *German Historical Institute Bulletin*, No. 32 (2003), pp. 9-28, esp. pp. 12-16.

⁸¹ 例えば、Kocka, J., *Das lange 19. Jahrhundert: Arbeit, Nation und bürgerliche Gesellschaft*, Stuttgart 2001。この『長い19世紀』という本は、伝統ある「ゲーブハルト：ドイツ史ハンドブック」の最新版（第10版）のうちの1冊（19世紀を扱う5巻のうち全体を概観する1巻）である。註72も参照。

⁸² Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 25-28.

なった。他方で、敗戦を目の当たりにし、それを用意したことになる19世紀の負の側面が歴史家たちに徐々に意識されるようになった⁸³。

ナチズムと第二次世界大戦を経た戦後、ドイツの歴史家たちの19世紀を見るまなざしは決定的に変化した。まず、国民国家の勃興と成功理の成立を中心に据える政治史ならびに国民国家史の相対化が見られた。それは、西ドイツでは60年代以降に展開した新しい社会経済史——少し遅れて文化史——により促進されたが、そこでは、19世紀は工業化の時代、産業資本主義の時代、総じて現代につながる近代化の時代として新たに立ち現れてくることになった。もちろん、この近代化は、進歩思想に基づく勝利への過程と解釈されることはなく、ドイツ史においては、ファシズムの暴力支配につながる特殊な道 *Sonderweg* として定式化されることになった。その反面、ドイツの19世紀の様々な局面における近代化のプロセスは、ヨーロッパ的なものであることも明らかにされていった⁸⁴。その後、しかし、19世紀のドイツが辿った道筋を特殊とする見方は、理論面でドイツ内外から批判を浴び⁸⁵、個別研究の進展によっても修正を促された。さらには、例えば農業社会から工業社会へ、という一定の方向性を持った移行や変化の過程として19世紀を捉えるよりも、その多層性や、場合によっては矛盾を含む多様性が強調されるようになり、それとともに19世紀全体を簡潔な文句で把握する試みは行われなくなった⁸⁶。

そうした状況の中で20世紀末が近づき、歴史家たちは再び過ぎゆく世紀を振り返り、時代としての特徴を探る作業を始めた。自分たちが生きてきた世紀と向き合うに際し、その一つ前の世紀をあらためて一つの時代として捉えようという意識が働いたとしても不思議ではない。いずれにせよ、「長い19世紀」というのは、20世紀の末になって——「短い20世紀」との対概念として——19世紀をある特徴を持つ一つのまとまった時代として把握するのに適的な表現だとみなされ、利用されるようになったのである⁸⁷。

コッカによれば、ドイツの「長い19世紀」を特徴付ける要素は、①工業化、②人口の急速な増加と移動、③国民国家、④市民層、の4つの「縦断面」で説明されうるといふ。個々の縦断面は決して19世紀のみに帰せられるべきものではないが、すべてを合わせて考えるなら、「それ以前」と「それ以後」とで明確に区別できるという。例えば④の市民層について、18世紀を「市民的」な世紀などと特徴付けることができようか、18世紀の市民層はまだ脆弱であり、確かに「市民社会」というコンセプトは啓蒙主義の言説に見られるが、まだ実現化されていなかった；他方、20世紀のドイツの独裁体制をいかにして「市民的」と呼べるであろうか；とはいえ、

⁸³ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 29f.

⁸⁴ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 30-34.

⁸⁵ いわゆる特有の道論争は、日本でも紹介されている：松本彰「『ドイツの特殊な道』論争と比較史の方法」（『歴史学研究』543, 1985）、末川清「『ドイツ特有の道』論について」（『立命館史学』19, 1998）、末川清「『ドイツ特有の道』論再考」（『政策科学』11-3, 2004）。

⁸⁶ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 35-38.

⁸⁷ 註72, 81参照。出版されたのは21世紀に入ってからだが、パウアーの『「長い」19世紀：ある時代のプロフィール』は、職業歴史家というよりは、学生や興味ある一般読者向けに書かれたもので、副題にあるように、一つの時代としての「長い19世紀」を概観するのに適している：Bauer, F. J., *Das lange 19. Jahrhundert. Profil einer Epoche*, Stuttgart 2004.

19世紀を「市民の時代」としてのみ特徴付けると、貴族層の特権、国家権力、数の上で圧倒的な優位にあった農民や力を高めつつあった労働者層の存在を過小評価することになる、と⁸⁸。さらに、このような特徴を持つドイツの「長い19世紀」は、他のヨーロッパ諸国の歴史から逸脱してはいなかったこと、両者を切り離して見ることはできないことが指摘され⁸⁹、結局、「長い19世紀」を簡潔な表現で言い換えるなら「古典的近代」になるのではないかと注意深い提案がなされる⁹⁰。

こうした「長い19世紀」という捉え方に異議がないわけではない⁹¹。また、歴史家の間で、「長い19世紀の」始点は「二重革命の時代」、終点は「第一次世界大戦」ということで意見の一致は見ているものの、そこに特定の西暦年号を割り当て際には論者によって見解の相違が見られる⁹²。しかし、ここで注意したいのは、「世紀」は、クロノロジーにおいてはもちろん、時代区分においても不可欠の概念だという点である。非常に限定されたテーマを扱う研究は別として、一般の歴史研究を「世紀」概念を用いずに行うことは、ほぼ不可能とも言えるだろう。その一方で、歴史家たちは、「世紀」という算術的な区分が実際の歴史の流れと合致し得ないことをふまえ、場合により「時代」や「時期」といった用語を利用する試みをしてきたことも事実である。「啓蒙の時代」といえば、クロノロジー上は18世紀のことであるが、それは厳密に1701年から1800年までを指すというより、啓蒙を最大の特徴とする100年くらいの時期を意味する。これは、「世紀」を「時代」に言い換える試みの成功例とみなせる。クロノロジー上の19世紀についても、歴史家たちは言い換えを可能にするための特徴探しに努めてきた。ドイツ史の例で見たとおり、様々な提案はあったけれども、いずれも他を圧倒して確立するには至らなかった⁹³。そうした中で、敢えて「世紀」概念に——1801年と1900年という年号で区切る不合理さを排除するための工夫を伴って——新しい光をあてたのが「長い19世紀」という表現なのではないだろうか。

おわりに

最後に、以上に述べてきたことを簡単にまとめ、若干の展望を示すことにしたい。まず、前半 (I) においては、英語、フランス語、ドイツ語における「世紀」という現在おなじみの概念が、若干の遅速はあっても16世紀以降になって誕生したということ、ナショナルな近代言語としては17世紀以降に普及し始めたこと、そして19世紀が、「世紀」概念を現在のように頻繁に利

⁸⁸ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 138ff.

⁸⁹ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 140-149.

⁹⁰ Kocka, *Das lange 19. Jahrhundert*, S. 149-154.

⁹¹ 註80を参照。ドイツ史の「長い19世紀」の内容についての立ち入った批判的考察は、別途に行われる必要がある。

⁹² ブラックバーン (註72) は1780年と1918年、フレーヴェルト&ハウプト (註72) は1789年と1914年、パウアー (註87) は1789年と1917年 (第一次世界大戦へのアメリカ参戦とロシア革命) を挙げている。

⁹³ オスターハンメル (註80) によれば、「全く奇妙なことに19世紀は名無しの世紀である」(Osterhammel, *In Search of a Nineteenth Century*, p. 10)。

用されるものに決定づけたということ、そうした大まかな流れを示すことができたように思う。とくに、厳密な史料批判に基づく実証主義歴史学が成立する際、「世紀」が時代区分として肯定的に用いられたこと、急速に発展するジャーナリズムにおいても「世紀」という用語は快く受け入れられたことなどが、「世紀」概念の普及に寄与したであろうことをドイツの例を中心に示唆した。続く後半部分（II）では、こうした19世紀的とも言いうる「世紀」概念が、歴史学において無批判に濫用されているわけではないことを明らかにしようと試みた。「世紀」を考える際のコンテクストとして、便宜的に、①歴史における時間（の観念）の問題、②歴史学が（ほぼ無意識に）前提とする分析や認識の枠組の問題、③歴史の時代区分の問題、と分類してみたが、重なり合う部分も大きい。いずれにしてもそれらは、「世紀」を意識的に考えるきっかけを提供していること、歴史家たちもそれに多かれ少なかれ応じていることが示せたように思う。ヨーロッパの近現代史研究において定着しつつある「長い19世紀」という表現は、欧米の歴史家たちが「世紀」概念と批判的に向き合ってきた一つの結果として捉えることができる。

「短い20世紀」の対概念として「長い19世紀」を支持する歴史家たちは、それが少なくとも欧米の大半の国や地域の近現代史を把握するのに適していることを強調する。反対に、それに異議を唱える歴史家たちは、「長い19世紀」を画するフランス革命なり第一次世界大戦なりの影響を直接に受けた地域が限定されていること、換言すれば、他の出来事の方が——グローバルな視点から見て——より多くの国や地域にとって画期となったことを指摘する。つまり、いずれの立場の歴史家も、時代区分の普遍性を重視し、「世紀」をより普遍的な妥当性を持つ概念にしようと試行錯誤しているのだ。だとすれば、欧米以外の国や地域の歴史家たちにも、こうした議論に参加する余地があるのではないだろうか。グローバル化という場合、それが欧米から開始されねばならないという理由はない。歴史学自体がポストモダニズムやポストコロニアリズムなどの影響により、ヨーロッパ生まれというルーツを相対化されてきている中、歴史学における「世紀」概念そのものやその利用の仕方、有効性への問いかけも、例えば日本の歴史家たちによってもなされうるのではないだろうか。これに対する答えを具体的に模索していくことは、われわれに与えられた今後の課題の一つである。